

2022年2月27日
宮崎中部教会主日礼拝
牧師 乾元美

詩編 42 : 12

ルカによる福音書 21 : 10~19

「忍耐によって命を勝ち取る」

<惑わされるな、おびえるな>

「忍耐によって命を勝ち取りなさい」。何か、叱咤激励されるような、イエスさまの御言葉です。忍耐によって、耐え忍ぶことによって、命を勝ち取りなさい。

でも、わたしたちはこれを聞いて、自分の忍耐力のなさを、決意の頼りなさを、意志の弱さを、不安に思うかも知れません。

耐え忍ぶということは、そこに痛みや苦しみがあることを意味しています。自分はそれに耐えられるだろうか。我慢する力があるだろうか。わたしたちはつい、自分の持っている力を量りつつ、不安に思ったり、心配になったりしてしまいます。

イエスさまは、このことをどういう意味で言われたのでしょうか。わたしたちに、一体どうすることを求めておられるのでしょうか。

さて、前回イエスさまは、人々に「惑わされないように気を付けなさい」、また「おびえてはならない」ということを教えられました。

この時イエスさまは、人々が心の拠り所にしてしているエルサレム神殿の崩壊を予告されました。それは人々にとっては、世の終わりに等しい、滅びと絶望を覚えるような出来事です。また、戦争や暴動も起こるものだと言われました。これも、世界が終わる破局の徴として、人々が恐れていたことです。

心の拠り所がなくなる。目の前のものが、崩れ、破壊され、失われていく。それは人間にとって、まるで自分の存在が根底から揺るがされるような、世界がひっくり返されるような出来事です。もうおしまいだ。世の終わりがくる。世界が破滅する。そう思われる出来事です。今わたしたちもまた、戦争の知らせを耳にして、そのような危機に直面していると言えるでしょう。

そのような時、わたしたちは、すべてが破局に向かっていると感じて、心がおびえてしまいます。そして、その恐ろしさや、焦りのあまり、見せかけの安心や、偽の平安に縋りつこうとし、簡単に惑わされてしまうのです。道を誤ってしまうのです。

しかしイエスさまは、「惑わされないように気を付けなさい」、「おびえてはならない」と言われました。なぜなら、「終わりの日はすぐには来ないから」です。

世界に終末をもたらすのは、神殿の崩壊や、人の罪や、人間の破壊行為によってではありません。そういうことは、まず起こるのです。

そして、本当の終わりの日、世界の終末は、神さまが救いの完成として来たらせて下さるものなのです。それは来週に詳しく語られますが、終わりの日は、人の子、つまりイエスさまが、天から再び来られることによって、もたらされます。

ですから世の終末は、おびえたり、惑わされたりしながら待つものではなくて、心から期待つつ待ち望むべき日です。終わりの日は、わたしたちの希望の日であり、すべての苦しみから解放され、神さまと会い見える、喜びの日だからです。

だから、あなたたちは、神殿が崩壊しても、戦争が起こっても、暴動が起こっても、不安や恐れを抱くあまりに、おびえるあまりに、簡単に目の前の偽りの安心に飛びついたり、誤った道に迷って行ってはならない。終わりの日は、神さまがお決めになった時に、神さまがもたらして下さるのだから、あなたがたは、まことの支配者である神さまを見つめて、いつも目を覚まして祈っていないさい。それが前回、イエスさまが教えて下さったことでした。

<もう一つの苦しみ>

しかし、今日のところでイエスさまが語られたのは、さらに、信仰者だけが経験しなければならない苦しみがあるのだ、ということです。

10 節以下にはこのようにありました。「民は民に、国は国に敵対して立ち上がる。そして、大きな地震があり、方々に飢饉や疫病が起こり、恐ろしい現象や著しい徴が天に現れる。しかし、これらのことがすべて起こる前に、人々はあなたがたに手を下して迫害し、会堂や牢に引き渡し、わたしの名のために王や総督の前に引っ張って行く。」

ここでは最初に、前回に語られた戦争や暴動の他に、自然災害などの、地震、飢饉、疫病なども語られています。これらのこともまた、起こるに決まっていることです。そしてこれらの共通点は、信仰のあるなしに関わらず、災いがそこにいる者に等しく降りかかる、ということです。その中で、あなたたちは惑わされないように、おびえないようにと言われた。終わりの日、イエスさまのご支配が完成する日としての終末を、待ち望むようにと言われた。

しかし今回イエスさまは、これらのことがすべて起こる前に、特にイエスさまに従う者が、信仰者だけが、受けなければならない苦しみがある、と言われたのです。

<二つの迫害>

信仰を持つために受ける苦しみ。それは、迫害のことです。

イエスさまを信じ、従う者たちは、イエスさまに逆らい、イエスさまを受け入れないで排除しようとする者から、イエスさまと共に迫害されることになるのです。

そしてそれは、外からと内からの、二つの迫害があることが語られています。

一つ目に語られているのは、信仰を持たない者たちからの迫害です。12 節「しかし、これらのことがすべて起こる前に、人々はあなたがたに手を下して迫害し、会堂や牢に引き渡し、わたしの名のために王や総督の前に引っ張って行く。」

このような迫害は、イエスさまが十字架に架かられて復活し、天に上げられた後、イエスさまの福音を宣べ伝える弟子たちが、実際に経験しなければならなかったことです。ユダヤ人たちから、またローマ帝国から、彼らは厳しい迫害を受けました。使徒言行録には、そうして命を失った者がいることも書き記されています。

そしてさらに厳しいのは、16節以下にあることです。「あなたがたは親、兄弟、親族、友人にまで裏切られる。中には殺される者もいる。また、わたしの名のために、あなたがたはすべての人に憎まれる。」

これは、身内や親しい者の間でも、信仰を持つ者と持たない者で分かれることがあるし、さらには信仰の仲間同士で、教会の中で、裏切りや、憎しみが起こってくる、ということもあるのです。外からの迫害が起こる時、内部でもまた、対立や分裂が生じることがあります。そして、仲間が仲間を迫害すること、家族にさえ裏切られることが起こってくる。「わたしの名のために」、イエスさまを信じるために、そうなると、言われるのです。

この、外からと内からの迫害は、世界の歴史の中で、また日本の歴史の中でも、キリスト者は繰り返し経験してこなければなりません。

日本の歴史でいえば、近年では第二次世界大戦での出来事です。日本の教会は厳しい立場に追い込まれました。その中で、国の要求に従った教会もあれば、最後まで抵抗し続けた教会もありました。そのために、教会同士が対立し、一方の教会が抵抗を続ける教会を見捨てるようなこともあったのです。その渦中にいた信徒一人一人にもまた、社会の中で、地域の中で、家庭の中で、大変な戦いがあったことと思います。

また、今この現代にも、すぐ近くの国で、厳しく迫害に遭っている教会の兄弟姉妹があります。まことの支配者は三位一体の神お一人である、という信仰が、国の統治にとって不都合だからです。そこでは、それこそ裏切りや内通があり、仲間内でも信頼を保てないような、そんな状況に置かれている人たちもいます。その中で、今も戦い、祈り、信仰に立ち続けている兄弟姉妹がいるのです。

引き渡され、投獄される。愛する家族、友にさえ、裏切られる。殺される者もいる。イエスさまの名のために、イエスさまを信じる信仰のゆえに、すべての人に憎まれる。

信仰を持つゆえに、その信仰に立つゆえに、受けなければならない苦しみがあるのです。イエスさまは、ご自分に従う者たちが、そのような迫害に遭うということ、これまでも繰り返し語ってこられたし、ここでまたはっきりと語っておられるのです。

<信仰を保てるか>

イエスさまは、どうしてこのように厳しいことを、あらかじめ教えられたのでしょうか。

このようなことを聞くと、わたしたちは怖くなってしまいます。信仰を持たない方が良かったのではないか。信じることをやめた方が楽なのではないか。そう考えてしまうかも知れません。

迫害の苦しみ。大切な人に裏切られる痛み。殺される恐怖。誰も、こんなものに耐えられ

る人はいません。逃げ出したくなる。やめたくなる。それは、弱いわたしたちにとって、当然のことだと思えます。覚悟や決意は、恐らく何の役にも立たないでしょう。

そうになったらわたしたちは、信仰を捨ててしまう、ということがあるのでしょうか。

…信仰は、わたしたちが神さまを信頼することです。神さまにすべてを委ねることです。

でも、わたしたちは、神さまから離れることが出来る。頼るのをやめることが出来る。委ねることをやめて、御言葉に耳を塞ぐことが出来る。神さまを無視し、捨て去ることが出来るのです。わたしたちは強制されて、洗脳されて、信じ込まされているのではないからです。

そうして神さまから離れても、人から怒られることも、罰金を払うこともありません。そこから去るだけ。

だからこれは、戦争や、地震や飢饉、疫病などの苦しみとは、全然ちがいます。自分から離れてしまうことが出来る、避けてしまうことが出来る、苦しみなのです。

だからこそイエスさまは、このことを特に何度も語ってこられたのではないのでしょうか。わたしたちに、神さまから離れてはならない、神さまに信頼することをやめてはならない、他の道に行ってはならない、と。

イエスさまは、わたしたちの弱さを、苦しみや痛みや恐れに対する弱さを、誰よりもよくご存じです。イエスさまご自身こそ、迫害の苦しみ、愛する人々に裏切られる痛み、殺される恐怖とその死の苦しみを、その身にすべて味わわれたお方なのです。イエスさまは、わたしたちのあらゆる弱さを、苦しみを、痛みを、誰よりもご存知です。

だからこそ、イエスさまはあえてこの苦しみがあることを教え、そして言われたのです。

「しかし、あなたがたの髪の毛の一本も決してなくならない。忍耐によって、あなたがたは命を勝ち取りなさい」。

<忍耐>

この「忍耐」という言葉。わたしたちは、どうしても自分自身の耐え忍ぶ力のことを考えます。だから、自信がないと思う。だから、不安になるのです。

しかし、ギリシア語の「忍耐」という言葉は、下に留まる、という意味です。ですから、この「忍耐」は、わたしたちに、暴力や苦しみや痛みを堪えて、我慢して、最後まで踏ん張り通せ、ということではないのです。

忍耐とは、留まることです。どこに？ それは、わたしたちが、主のものである。イエスさまに捕らえられて、イエスさまのご支配にある。この恵みの事実の下に、留まっていなさい。あなたが神のものであるということ。ただそこに、立っていなさい、ということなのです。

12節以下にはこのようがありました。「しかし、これらのことがすべて起こる前に、人々はあなたがたに手を下して迫害し、会堂や牢に引き渡し、わたしの名のために王や総督の前に引っ張って行く。それはあなたがたにとって証しをする機会となる。だから、前もって弁明の準備をするまいと、心に決めなさい。どんな反対者でも、対抗も反論もできないような

言葉と知恵を、わたしがあなたがたに授けるからである。」

これは、捕らえられ、引き渡され、王や総督、時の権力者の前に立たされる時。あなたは、これを良い機会と思って、勇気を出して、その場で王や総督にその信仰を立派に証し出来るように、ということではありません。

どんな反対者でも、対抗も反論も出来ないような言葉と知恵。これは、この場で相手を言いくるめたり、言い伏せたり、論駁する、ということではありません。

イエスさまの名のゆえに、引き渡されている。イエスさまの名のゆえに、苦しみを受けている。黙っていたとしても、そこに立っているということ自体が、その人がイエスさまを信じる者であるということを証しする、ということです。その人を、そこに立たしめている、イエス・キリストという存在が、指し示されるということです。

なぜそこに立っているのか。なぜイエスさまを信じているのか。

わたしたちは、この方だけが救い主だから。この方が救って下さったから。そうとしか答えようがありません。そして、それが真実なのです。

信仰は、自分の信じる力のことでありません。信仰とは、信頼できる方を信頼し、仰ぎ見ることです。そうであるならば、信仰は、わたしたちの持ち物ではありません。わたしたちの信仰は、わたしたちに愛と命を示して下さった神さまから与えられたものであり、神さまが支え、神さまが守って下さるものなのです。

わたしたちは、神さまが命を与えて下さったこと。神の御子に罪を赦されたこと。死でも終わらない希望があることを、教えられたのです。もはやわたしたちは、イエスさまの救いなしに、神さまというお方なしに、生きることは出来ないと、知らされている者なのです。

イエスさまの下にしか、まことの命はありません。罪の赦し。死を超えた復活の希望。弱さと惨めさに満ちたわたしたちを、神さまが完成させて下さる約束。それがなければ、わたしたちは、本当には生きられないのです。だから依り頼んでいるのです。だから信じているのです。

そしてわたしたちは、たとえ逃げても、失敗しても、つまずいて転んだとしても、やっぱりここに戻ってくるしかないし、他に行くところがないのです。

反対に言えば、ここにさえ立っていれば、何も恐れることはないのです。イエスさまの下にいたことが、命を得ることであり、生きていることなのです。

イエスさまが言われた、「忍耐によって、あなたがたは命を勝ち取りなさい」。それは、つまり「わたしの下に留まっていることによって、あなたがたはまことの命を受けなさい。」ということです。

<イエスさまの下に>

わたしたちが留まる場所は、このイエスさまの下しかありません。しかしそれは、イエ

スさまの下にいれば、やがて迫害から救われて、必ず助け出されて、幸せになるとか、苦しみが終わるとか、そういうことではありません。殺される者もいる。イエスさまはそこまではっきりと仰いました。

しかしなお、世のどんな混乱の中にあっても、嵐が吹き荒れる中であって、イエスさまが共にいて下さるのならば、わたしたちはそこにあって平安を生きることが出来る。この世の絶望的な状況の中にあっても、光を持っていることが出来る。この世で命を失うことになったとしても、永遠の命を得ることが出来る。イエスさまの下に留まって生きる命とは、そのような命なのではないでしょうか。

「髪の毛一本も決してなくなる。」神さまがご自分のものとされた、わたしたちのすべては、髪の毛一本たりとも、神さまが手放されることはありません。どんな権力も、どんなこの世の破壊的な力も、神さまからわたしたちを、髪の毛一本たりとも奪うことは出来ないのです。神さまと共にあることこそ、わたしたちが生きるということであり、まことの命を得ることだからです。

そのためにイエスさまは、十字架に架かり、ご自分の命をもって、わたしたちを罪と死から解放し、神さまの御許へ、ご自分の許へ、取り戻して下さったのです。イエスさまの命によって、わたしたちは神さまのものとされたのです。

あなたが神の子だという、この確信。この慰め。この平安。ここに留まりなさい。

そこだけが、イエスさまがご自分の命を懸けて差し出して下さった、わたしたちの本当の居場所なのです。

しかしわたしたちは、やはり迫害などが起こったら、自分はどうなるか分からない、と心配になるのでしょうか。信仰に留まる自信がない。そう思うのでしょうか。

自信がない、と思う間は。出来ないかも知れない、と思っている間は。それはやはり自分の力に頼ろうとしているし、自分の力で出来なければならない、と思っているのです。

神さまに委ねるしかありません。神さまに寄り縋るしかありません。

十二使徒のペトロのことを思い起こしてみましよう。ペトロはイエスさまに「主よ、ご一緒になら、牢に入って死んでもよいと覚悟しております」と言いました。死ぬことも出来ると思っていた。迫害に屈しないで死ぬ覚悟があった。それは、本当だったと思うのです。

しかし、イエスさまが「あなたは三度わたしを知らないと言う」と言われた通り、ペトロはあの人の仲間かと聞かれて、あっさりとイエスさまを裏切り、三回も否定したのです。

でもイエスさまは、そのようなペトロの弱さをもご存じでした。イエスさまは、ペトロのために祈っておられたのです。「信仰がなくならないように」と。

ペトロがイエスさまを見捨てても、イエスさまはペトロを見捨てることはありません。

イエスさまは、この裏切ったペトロの罪をも赦すために、ペトロに神と共に生きる命を与

えるために、十字架の死へと向かわれたのです。ご自分の命を与えられたのです。

覚悟や、決意ではどうにもなりません。わたしたちには、何の力もありません。

でも、イエスさまが、わたしたちを支えて下さる。わたしたちのために祈って下さる。そして、イエスさまの救いの恵みに留まるように、イエスさまの御手が、わたしたちをしっかりと捕らえていて下さるのです。

わたしたちは、このイエスさまの御手から目を逸らしてはなりません。頼ること、寄り添うこと、祈り求めることをやめてはなりません。

わたしたちが祈り続けるとは、このイエスさまの御手がわたしを捕らえて下さっていることを、見つめ続けることなのです。そして、「あなたの髪の毛一本も決してなくならない」とのイエスさまの御声を、繰り返し聞くことなのです。自分のために命を差し出して下さる、このお方に、ひたすら頼ること。それが、信仰ではないでしょうか。

わたしたちが、このイエスさまの御手を確かに感じる事が出来る時。わたしたちは、自分の力では立てないところに、立つことが出来ます。苦しみの中で、慰めを見出すことが出来ます。困難の中で、希望を見出すことが出来ます。暗闇の中でも、嵐の中でも、イエスさまの下にいるならば、恐れも、不安も、苦しみもイエスさまの御許へ投げ出せばよいのです。やがてわたしたちは、すべてを受け止めて下さる主にあって、心を慰められ、自分が最も揺らぎないところに立たされていることを知り、耐え忍ぶ力が与えられていくでしょう。

そして、やがて来る終わりの日に、すべての苦しみを取り去られ、すべての涙が拭われ、天の喜びにあずかることを、確かなこととして待ち望むことが出来るのです。

「忍耐によって、あなたがたは命を勝ち取りなさい」。主の御許に、留まりましょう。

【お祈り】

天の父なる神さま

弱いわたしたちを憐れんで下さい。イエスさまが十字架と復活の御業によって、わたしたちを罪と死から解放し、恵みのご支配のうちに捕らえて下さいました。どうか、この恵みに留まらせて下さい。聖霊によって、いつもわたしたちを祈りへと導き、わたしたちの髪の毛一本までも数え、愛し、見つめて下さっている神さまを、心から信頼し、御顔を仰ぎ見続けることが出来るようにして下さい。

救い主イエスさまの御名によって祈ります。アーメン